

氏 名	オオ タケ アヤ ナ 大 竹 彩 奈
学 位 の 種 類	博 士 （美 術）
学 位 記 番 号	博 美 第 364 号
学位授与年月日	平 成 24 年 3 月 26 日
学位論文等題目	〈論文〉生の証－恐怖と毒々しさ－ 〈作品〉彩の喧騒 たゆたう
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教 授 （美術学部） 関 出
（論文第 1 副査）	” ” （ ” ） 佐 藤 道 信
（作品第 1 副査）	” ” （ ” ） 梅 原 幸 雄
（副査）	” 准教授 （ ” ） 齋 藤 典 彦
（ ” ）	” ” （ ” ） 植 田 一 穂

（論文内容の要旨）

これまで私は、人の内面の複雑さ、人間らしさに興味をもち、それを表現することで生命感も表すことが出来るのではないかと思い、制作してきた。絵を描く際にイメージするものや、描かれた絵は恐ろしさや不気味さを伴った。それは私が人に対してそうしたイメージをもっていることに他ならないのだろうが、実際に画面にいわゆる恐ろしい雰囲気ダイレクトにぶつけてみると、それは結果的に「恐ろしい感じの絵」にすぎず、私の求める人の複雑さ、人間らしさを表現した絵とは根本的にずれがあるように感じた。内面の複雑さを表現するための恐ろしさとはどのようなものなのか。例えば近代日本画の美人画では、女性美を追求した夢のように美しい女性が多く描かれているが、中には幽霊のように、実態のない様子で描かれているものも少なくない。単に美しく描かれたものはもちろん心を癒すが、そうしたどこかゾッとさせるものに私は惹かれてしまう。そのように描かれた人物は、身体ではなく、精神をリアルに感じさせるのだ。私はその「恐ろしさ」から、避けようも無く生臭いほどの日本人独特の「生」を感じる。

本論では、私がこれまで画面の中に投じてきた「恐ろしさ」がどのようなものなのか、過去に「恐ろしさ」を感じた記憶や、制作に度々使用してきたモチーフを挙げて考察した。「生」を表現するために必要な「恐ろしさ」とは、どのようなものなのかを明快にすることで、今後の作品制作への指標とすることを目的とした。

第 1 章では、私がこれまで恐怖を抱きつつも興味を持ってきた日本独特の「恐ろしさ」について述べた。現代の日本は、ありとあらゆるものが情報化され、合理的かつ科学的な社会に見えるが、社会から個人にいたるまで、根底には昔から脈々と受け継がれてきた土着の信仰が、形を変えて今も生き続けている。私がしばしば不気味に感じるのは、人が何かを過度に信じたり執着したりする行為だ。それは周囲に精神的危害を加えた場合、ネガティブな性質となる。日本の習俗的なものを見たり聞いたりした時には、裏に大抵そのネガティブな性質が潜んでいる。しかしこのネガティブな行為には、同時にリアルな人間らしさや生命感が満ちている。その具体例として、過去に見た盆の魂送りから受けた土着信仰の不気味さ、寺山修司の映画作品に見た「キッチュ」な不気味さを挙げ、それらについて述べた。

第 2 章では、私がこれまでの制作で度々用いてきた「きもの」の悲哀と毒々しさ、生命感について考察した。「きもの」という既に出来上がった装飾美を画面に配置するのは、画面を構築する上で比較的安易な方法である。もの自体の視覚的魅力が強いためだが、それでも「きもの」を用いてきた理由は、人

の精神性を表現するための媒体として有効だと考えてきたからだ。「きもの」には多義性があり、それは様々なことを暗示しうる。ここでは、鮮やかな「きもの」に対して感じる自虐的精神と悲壮感、魂の依り代としての生々しさ、毒々しい赤い色と「きもの」を画面に配置する意味について述べた。

第3章では、画中の人物の表情がもつ意義と、眼差しの効果について述べた。人物の顔の表情を描いている間、私は観賞者としての視点と、画中の人物の視点を行ったりきたりしている。私自身はその両方であり、またどちらでもないような感覚だ。観賞者として画中の顔と向き合うことは、言葉無き空間をその人物と共有することであり、心の深い繋がりを促す。能面のように無表情に近く、曖昧な表情は、対峙する者の心の鏡として機能する。明快な感情表現と曖昧な感情表現が観賞者にもたらす不安や恐怖を探った。また、生きていることの証である眼差しについて、その表現方法と意義について述べた。

第4章では、これまで述べてきた「恐ろしさ」と「生」についての考察をふまえ、過去の自作品と提出作品を振り返り、生命感や人の内面の複雑さを表現する上で必要な「恐ろしさ」と「毒々しさ」を考察した。おわりに、本論を進めるに従い気付いた「美」という要素が、「恐怖」や「毒々しさ」とどのような関係をもつべきかを述べ、今後の制作の方向性を探った。

(博士論文審査結果の要旨)

同じ恐怖でも、思わず身を引く恐怖と、不気味で気になるところか引き込まれるような恐怖とでは質が違う。土着の習俗や古着がもつまとわりつくような不気味さに、逆に強烈な生を感じるという筆者が、その質と理由、自らの制作との関係を論述したのが本論文である。

人間の内面の複雑さに人間らしさを感じるという筆者の作品は、実際に描くとなぜか不気味さを伴うものになった。単に恐ろしい絵を描きたい訳ではない筆者は、それに違和感を感じつつも、なぜそうした絵になるのか、不気味なものに魅かれる理由を確認する。

都会に育った筆者は、幼少期から成人するまで毎年、夏休みを母の郷里の山陰の小さな漁村で過ごした。お盆の最後に村人総出で行なわれる送り火の行事「オオガラブネ」は、男女の裸体人形の周りを灯籠や提灯、供花などが埋めつくした精霊舟を、男たちが泳いで薄暗い海の沖まで流しに行くものだった。読経、ローソク、線香と磯の匂い、ケバケバしいまでの装飾、なぜか猥雑な男女の裸体人形。聖と俗、此岸と彼岸、生と死が、視覚・聴覚・嗅覚を襲う不気味な光景を、筆者は身じろぎもせず凝視した。この「生臭いほどの」土着の信仰と習俗に、生と死が同居する不気味な恐怖を見た体験が、自身の根底にあることを筆者は確認する。したがって、筆者が絵にしたい不気味さや恐怖は、本来視覚表現だけではおさまり切らないものなのだろう。寺山修司の映画「田園に死す」や智内兄助の初期の作品にも、筆者は同様の不気味さを感じ取っている。

筆者が自身の制作で実際に多用しているモチーフは、女性の古着の着物である。着物や人形には、それを愛用した人の生が、痕跡のように染み込んでいる。古着を着ることは、過去の生、他者の記憶をまとうことであり、そこには親しさと不気味さが同居する。筆者が魅かれるのは、大正から昭和初期の色彩豊かで大胆な図柄の着物らしいが、筆者はそこに悲哀を感じるという。同時に、自身の作品「赤光」(2006)、「宵闇の華」「夢想灯路」(2008)、「西の刻」「ミコト」(2009)などで描いた着物が赤であるように、筆者は赤、とくに毒々しい赤の色に強い生命感を感じている。ところがこうした作品で“おどろおどろしさ”が先行してしまったことに、なぜか筆者は違和感を覚える。つまりそれが筆者の目指す不気味さと恐怖の表現ではないということだ。

そのため、筆者は並行して能面に注目し、無表情の中の目と視線に、不気味さや様々な感情の表出を試みる。審査会では、そうした作品「その日」(2007)、「蓮のひと」(2009)、「ゆかたざらい」「四顆」(2010)などでの明るい色彩が、“おどろおどろしい”前記作品とどう関係しているのか、ややわかりにくいという指摘があった。提出作品「彩りの喧騒」「たゆたう」では、再び前記作品に近いものになっており、

こうした揺れ幅は、おそらく不気味さや恐怖の表現をめぐる試行錯誤ゆえのものなのだろう。

ただ筆者が論述中で、人間の「内面の複雑さ」や「多義性」にくり返し言及していることからすると、不気味さや恐怖に軸点をおきながらも、じつは聖俗や明暗の両義性、多義性をもつことが人間らしさであり、むしろそれを表現するために試行錯誤しているのかもしれない。そして「おわりに」で述べている、生の証としての恐怖や毒々しさが「美」となるためには、「適度な程度」が必要なのだという、一見平凡なしかし重要な結論は、試行錯誤の末に筆者が確かな現状認識と手応えを得るに到ったことを示している。学位論文として十分なものとして審査会の評価を得た。

（作品審査結果の要旨）

申請者、大竹彩奈さんは、学部・大学院を通じて、着物を主なテーマとした人物画を数多く描いてきた。卒業制作「赤光」修了制作「酉の刻」は卓越した素描力と構成力のある完成度の高い作品で、恐ろしさと不気味さを感じさせる魅力的な作品である。その修了作品は首席で、芸大美術館買い上げとなり、博士後期課程に進学した。

申請者は、これまで制作した作品に対し恐ろしい・不気味と評される度に、申請者自身はむしろそのような特徴は嫌悪感を覚えるのに、なぜそのような作品になってしまうのかという戸惑いと不快感を感じていたと述べている。その自己の作品に対する心の解析を、生の証－恐怖と毒々しさ－という論文題目で論考すると共に、作品においても「蓮のひと」（2009年・紙本彩色）「ミコト」（2009年・紙本彩色）において、毒々しさ・恐ろしさを意識的に画面構築した作品と、「四顆」（2010年・紙本彩色）「ゆかたざらい」（2010年・紙本彩色）においては恐ろしさを全て排除した上で、申請者自身が表現したい生命感や人間性を考えて制作をこころみている。

博士課程発表展における提出作品「彩りの喧騒」「たゆたう」の2点においては、自分の考えを再考し、恐ろしい絵を描くのではなく、人間性を主に描きたいと考えた作品であるが、意識された試作のため、説明的なことが前面に出ており、今まで制作してきた上で自然に表れていた不気味な魅力が薄れてしまったのが残念ですが、今後の制作においては、理論で理解した上での無意識の絵画制作により、上質な香りのある毒々しい作品になると確信します。

2011年12月15日の大学美術館における博士審査展において、審査委員全員が申請者の一連の作品に対し、高く評価し学位に相応しい作品であると判断し合格とした。

（総合審査結果の要旨）

人物画を、とりわけ女性と着物を題材として描く申請者は、容姿の美しさを強調するのではなく、外からでは窺い知ることができない心のうちの様相を主なる対象として制作する。人の心の複雑さにゾッとさせられるほどに惹かれ、そこに人間らしさや「生」を実感するという背景には、幼い頃からの体験が存在する。土着の生活様式の中には、衝撃を受け恐れるほどの行為が慣習としてあり、来歴の分からない古着にも他人の気配に不気味さを感じず、同時に生命感に満ちていて暗示に富むものでもあると論述している。自身の作品「赤光」（2007）は、複雑な魔性の生命感を思い浮かべて構成したもので、秀逸な表現力を示している。「酉の刻」（2009）は、手前に低く横たわる虚ろな表情の女性を配し、その背後には着物が暗がりの中に深紅に描かれている。「憑依した魂は様々なことを語る」と、申請者が古着に抱く霊性を意図したもので、象徴的で怪しい怖さを含んだ作品である。赤黒い着物と異形の女性像によって「生」の確証を得ようと構想した狙いから、その後人物画における感情表現へと研究的が集まり、画面上の組み立てに展開がみられる。それは、心を占める悲哀や忿怒の感情を直に面貌表現することではなく、能面のように曖昧で多義性を持った表情や形態を必須とする。その意味で、作品「蓮のひと」

(2009)、「四顆」(2010)では、複雑な心情の不思議さを表そうと取組んだ成果である一方、画面の世界は明るい空間領域へと移行する。この制作の流れを経て、作品「ゆかたざらい」(2010)に繋がる認識として、人の曖昧で繊細な部分を表現しようとした末に、滲み出る僅かな恐怖感こそ意図する核心と、申請者は確認する。不気味で恐ろしい印象がある画面から、明度の高い色彩表現による作品への動きには、自身の発想の変遷が反映しているが、他者には些か解釈しにくい変化と受けとめられる。

提出作品「彩りの喧騒」(2011)は、古物市にて吊り下げられた多くの着物が発する生々しい色合いや、ざっくりとした形態の妖しくざわめく様子に心惹かれた申請者が、その場面で強く意識した生命感を表現しようと試みた作品となっている。「たゆたう」(2011)は、その面貌の表現に潜む不気味さを示しながらも、自身が目指す人間らしさの表現を盛り込もうと意図した作品である。申請者は、これまで人物の面貌表現に格別な関心を寄せ探究している。

それは、画面と自身の心中との交感の実質を探ろうと志向するところと評価する。日本画の表現において、素描力でも技法面においても卓越した造形的感覚が発揮されている。

平成23年10月7日の審査委員会審議を経て、12月15日の「博士審査展・公開発表会」の審査終了後に、全委員による最終試験（口述）を実施した。申請者の創造的な理解力や知識が研究成果として十分身につけていることを確認し、その内容が学位取得に相応しい水準に達しているものと審査委員が一致して認め、合格と判定した。